法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-02-09

【小特集】『星雲』と立石伯 : 立石伯自筆年譜

(出版者 / Publisher)
現代文藝研究会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
現代文藝研究
(巻 / Volume)
3
(開始ページ / Start Page)
163
(終了ページ / End Page)
173
(発行年 / Year)
2024-04-30

立石伯自筆年譜

一九四一（昭和一六）年　当歳

八月三十一日、父・堀江實藏（一九〇三年・明治三六生）、母富子（一九〇五年・明治三八生）、七人兄姉の末子五男として、鳥取県東伯郡大字八橋町字八橋一四四一番地に生れる。（現在大字琴浦町）。本名・堀江拓充。北は日本海に面して遠くに隠岐の島を、南は大山を望める地。

＊父が四七年四月23回衆議院議員総選挙で「鳥取県農民総同盟」の推薦で当選。次回は労働者農民党から立候補して落選。

一九四八（昭和二三）年　七歳

四月、八橋町立八橋小学校に入学。海に近い古い城山の麓の木造校舎。中学校舎もあった。海浜、城山などが小学生時代の遊び場となる。少年向きの世界・日本名作集、月刊漫画雑誌などを読む。成績等上位。

＊十一歳頃――体育等の能力の低い上級生から競技で負けた腹いせに「アカの子」と差別される。すこし後年、幡新守也という人から、太陽系・地球の寿命は八億年位と聞いて衝撃をうける。（太陽が赤色巨星になりうる現在の予測はもっと長い）

一九五四（昭和二九）年　十三歳

四月、町村合併があり、東伯町立東伯中学校に入学。テニス、野球、陸上競技等に熱中する。そのかたわら、図書館の日本文学、世界文学の文庫本を五〇音順に読み進めることに挑戦、挫折。また、宇宙に興味をもち、ロケットを友人と組立、海浜で発射などをする。三年生の二学期に、米子市立第一中学校に転校。

一九五七（昭和三二）年　十六歳

四月、鳥取県立米子東高校入学。一年生の後半から、文学書等の読書に熱中。特に、当時同校教員、詩人の渡部兼直先生の部屋に学校を抜けて昼間から入り浸り、書棚に蒐集された文学・芸術関係の書物を濫読。学校は代返で凌ぐ。中でも古い「群像」等に掲載された埴谷雄高の評論（「永久革命者の悲哀」など）、ドストエフスキィの小説『罪と罰』などに特に驚愕する。二年生の後半から、仲間数人と社会科学関係のサークルをつくり、政治、革命、折から問題となった日米安保関係の問題に目を向ける。三五年一月一六日、上京し当時の首相岸信介らの渡米反対をかかげて羽田空港で阻止行動をした全学連の隊列の座りこみに参加。この頃ラジオでたまたまモーツァルトの弦楽四重奏曲K・387、K・421などを聴き西欧古典派音楽に覚醒。

一九六〇（昭和三五）年　十九歳

三月、米子東高校卒業。東京・高円寺で兄宏美と同居し浪人生活を送る。終生の友・佐々木萌生などを知る。一方、四月から盛んになったブント系の日米安保反対闘争に参加。六月一五日に国会突入のデモに。「六月行動委員会」の会議に出て、埴谷雄高、丸山眞男、秋山清、吉本隆明などの顔を知る。石川淳、坂口安吾、埴谷雄高、武田泰淳を初めとする日本近・現代文学、マラルメ、ランボー、ボードレール、ドストエフスキイ、バルザック、セルバンテス、サルトル、カミュなどの小説や詩などを少しずつ系統立てずに読む。同時に、日本文学、世界文学の主要なものを新たに濫読。またモーツァルト、バッハ、ベートーヴェンなど西欧古典派音楽を聴き続け、映画にも没頭する。

一九六一（昭和三六）年　二十歳

四月、法政大学文学部第一部日本文学科に入学。中野区鍋屋横丁で下宿。自治会活動に携わる。講演依頼を手紙で断られたために、直接に埴谷雄高の吉祥寺の自宅を初めて訪問。翌年後半から学校に行かないで、一種の放浪生活を送る。詩誌「時間」同人の本柳武慶、松村憲二などと親交を結ぶ。鎌倉市小袋谷に転居。六三年頃大久保富子を知る。このころさまざまなアルバイトをし、そのひとつに音楽雑誌「ディスク」もあった。この関係で各種クラシックコンサートに行く。富子と新宿区戸塚のアパートで同居生活を送る。

一九六六（昭和四一）年　二十五歳

三月、法政大学同学科卒業、卒業論文は石川淳論。四月、法政大学大学院人文科学研究科日本文学専攻修士課程入学、小田切秀雄に師事。五月、同人雑誌「星雲」創刊、創刊同人は、石渡康之、佐々木萌生（宮内豊）、永野隆史、堀江拓充（立石伯）、松村憲二、本柳武慶。創刊号から第六号（六八・六）まで「館」連載、未完。

一九六七（昭和四二）年　二十六歳

一一月、大久保富子と結婚式を挙行。九月、「石川淳《精神の悪運》」（「星雲」第五号）

一九六八（昭和四三）年　二十七歳

九月、長女瑞香誕生。府中市三好町に転居。

一九六九（昭和四四）年　二十八歳

三月、同課程修了、修士論文は埴谷雄高論。四月、同博士課程に進学。十一月、「星雲」第七号に埴谷雄高「虚空」論など翌年にかけて連載をはじめる。

一九七一（昭和四六）年　三十歳

七月、修士論文をもとに『埴谷雄高の世界』を筆名立石伯で講談社より刊行。同月、「行為と認識の挫折――高橋和巳小論」（「星雲」第九号）

一九七二（昭和四七）年　三十一歳

一月、「庄野潤三『静物』論」（「文学的立場」）。四月、『高橋和巳の世界』を講談社より刊行。週刊「読書人」で文芸時評を担当。一〇月、「武田泰淳覚書」（「星雲」第十号）。一一月、母死去。この年一二月より現在地の狭山市上広瀬に居住。

一九七三（昭和四八）年　三十二歳

二月、「リュンケウスの眼――埴谷雄高論」（「現代の文学3」講談社刊）。三月、同課程単位修得後中退。四月から六月、『埴谷雄高評論選書全3巻』を編纂し講談社より刊行。六月、「旅立」（「星雲」第十一号、翌年二月第十二号で完結）

一九七四（昭和四九）年　三十三歳

四月、「高橋和巳における大学闘争――返書のない手紙」（「國文學」）。六月、「埴谷・花田論争をめぐって」（「解釈と鑑賞」）

一九七五（昭和五〇）年　三十四歳

十月、「ドストエフスキィ論　断章一」（「星雲」第十三号）

一九七六（昭和五一）年　三十五歳

一月～六月、「武田泰淳論」（「群像」）連載。一〇月、「ドストエフスキィ論　断章二」（「星雲」第十四号）。一二月、「苦しみを求める心――武田泰淳追悼論文」（「群像」）

一九七七（昭和五二）年　三十六歳

六月、「埴谷雄高『死霊』論」「武田泰淳『司馬遷』論」（『明治・大正・昭和の名著・総解説』自由国民社刊）。一一月、『武田泰淳論』を講談社より刊行。「十字架を背負う男たちの究極――埴谷雄高論序説」（秋山駿編『作家の世界・埴谷雄高』番町書房刊　本書に埴谷雄高・秋山駿との鼎談「存在の窮極のかたちについて」、埴谷雄高年譜）

一九七八（昭和五三）年　三十七歳

四月、法政大学文学部日本文学科専任講師就任、一九八〇年四月、助教授、一九八四年四月、教授。

三月、「埴谷雄高著作解説」（「ユリイカ」）。七月～九〇年一一月まで長篇小説「朔風」（「星雲」第十五号～第二十六号連載）

一九七九（昭和五四）年　三十八歳

三月、「十字架を背負う男たちの究極――埴谷雄高論2」（「法政大学文学部紀要」）。一〇月「『死霊』――「政治と文学」を越えるもの」（「現代の眼」）

一九八〇（昭和五五）年　三十九歳

四月、「世界文学史のなかの日本文学史」（小田切秀雄編著『日本文学史』北樹出版刊）

一九八一（昭和五六）年　四十歳

八月～一〇月「啓示の文学――ドストエフスキィと魯迅」（「公明新聞」）

一九八二（昭和五七）年　四十一歳

九月、「埴谷雄高・本文および作品鑑賞」（磯田光一・北川透編『鑑賞日本現代文学30　埴谷雄高・吉本隆明』角川書店刊）

一九八三（昭和五八）年　四十二歳

七月～翌年四月まで3回「自由の偏光――石川淳と埴谷雄高の出発と究極Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」（「日本文學誌要」）

一九八四（昭和五九）年　四十三歳

八月、「やさしいまなざしの見るもの」（中薗英助『裸者たちの国境』徳間文庫、解説）

一九八五（昭和六〇）年　四十四歳

六月から一〇月まで、大学の在外研修でソ連、ポーランド、東ドイツ等の東欧、フランス、西ドイツ、イギリス、スペイン、ギリシアなどの西欧二〇か国ほどを旅行する。バックパッカー的遍歴。その間の八月、妻・富子などと合流しザルツブルク音楽祭でモーツァルトなどを聴く。五月、「『死霊一章～三章』論（改訂）」（白川正芳編「『死霊』論――頭蓋のシムフォニイ」洋泉社刊）。七月、「黒井千次論――文学と思想の命運1」（「日本文學誌要」）

一九八六（昭和六一）年　四十五歳

一月、父死去。四月、翌年三月まで大学の学生部長に就任。一月～七月、「西欧見聞抄」連載（「週刊読書人」）。六月、「真継伸彦論――文学と思想の命運2」（「日本文學誌要」）。一〇月～九九年一〇月、「西欧遊記」（「星雲」第二十四号～第三十一号　6回連載完結）

一九八七（昭和六二）年　四十六歳

二月、「埴谷雄高・人と作品」（『昭和文学全集16』小学館刊）。三月、「『死霊七章』論――十字架を背負う男たちの究極」（「日本文學誌要」）。四月、『日本文学特講2』法政大学通信教育部より刊行。七月、「ランボオの墓、その沈黙」（「日本文學誌要」）。九月から一〇月中旬まで中国・広州外国語学院で日本現代文学の講座。終了後西安、蘇州、杭州、上海、北京など中国各地を歴遊。

一九八八（昭和六三）年　四十七歳

六月、「イデアの誘惑――大江健三郎『懐かしい年への手紙』論」（「日本文學誌要」）。一〇月、「作家案内」（石川淳『鷹』講談社文芸文庫）

一九八九（昭和六四・平成元）年　四十八歳

一月、「アヴァンギャルドとメタフィジック」（『講座昭和文学史第4巻　日常と非日常』有精堂刊）。二月、「不可能性の映画――埴谷雄高における映画」（「昭和文学研究」）、「『何日君再来物語』について」（「日本文學誌要」）。三月、「石川淳論（一）」（「法政大学文学部紀要」）、「転変する中国像」（武田泰淳『風媒花』講談社文芸文庫、解説）。五月、「未知に挑む無道人」（石川淳『紫苑物語』講談社文芸文庫、解説）、「ノートの意味――石川淳の方法の一面」（「早稲田文学」）。一一月、「彷徨する青春」（石川淳『白頭吟』講談社文芸文庫、解説）

一九九〇（平成二）年　四十九歳

三月、『石川淳論』をオリジン出版センターより刊行、「石川淳論（二）」（「法政大学文学部紀要」）、「石川淳の江戸留学」（「日本文學誌要」）。四月、文学部長就任、九三年三月まで三年間。一一月、「アヴァンギャルドの精神」（「日本学」）。一二月、「真継伸彦と親鸞」（「解釈と鑑賞」）、「巴里（パリ）長安（チャンアン）聖彼得堡（セント・ペテルブルグ）江戸（エド）」（石川淳『江戸文学掌記』講談社文芸文庫、解説）

一九九一（平成三）年　五十歳

六月、「夷齋随筆骨法」（石川淳『安吾のいる風景』講談社文芸文庫、解説）。九月、「埴谷雄高――虚実の向こう側」（「マガジンハウス」）。一〇月、「精神の危機の超克」（石川淳『黄金伝説・雪のイヴ』講談社文芸文庫、解説）、「埴谷雄高の『死霊』を今なぜ読むか」（「公明新聞」）

一九九二（平成四）年　五十一歳

二月、「荒ぶる神と闇の力」（石川淳『落花・蜃気楼・霊薬十二神丹』講談社文芸文庫、解説）。五月、「新しい炉火をかかげる作家達――石川淳・坂口安吾・埴谷雄高の精神の同質性」（「早稲田文学」）。六月、「変貌の機微と偽書のたくらみ」（石川淳『影・裸婦変相・喜寿童女』講談社文芸文庫、解説）、「埴谷雄高全著作解説」（「太陽」）。九月、中

国・北京大学で日本戦後文学の講座、また北京大学図書館、白石橋の国立図書館で戦中の日本語書籍および日本関係雑誌・文書等を調査。一〇月、「沸き立つことばの世界」（石川淳『ゆう女始末・おまえの敵はおまえだ』講談社文芸文庫、解説）。一一月、「『悟浄出世』と『普賢』の距離――中島敦と石川淳の表現意識の差異」（勝又浩・木村一信編『中島敦』双文社刊）。「作家案内」（武田泰淳『蝮のすえ・「愛」のかたち』講談社文芸文庫）。

一九九三（平成五）年　五十二歳

一月、「ある季節と城――『彷徨のとき』の世界」（中薗英助『彷徨のとき』解説　批評社刊）、「亡き石渡康之を偲んで」（「星雲」第二十七号（石渡康之追悼号））。五月、「偉大なる呪われた罪人の聖化」（石川淳『荒魂』講談社文芸文庫、解説）。七月、「文学の原質と中国・中薗英助」（インタビュー「週刊読書人」）

一九九四（平成六）年　五十三歳

六月、『朔風』をオリジン出版センターより刊行。七月、「もう一つの季節と城――『北京飯店旧館にて』論」（「日本文學誌要」）。九月、中国・北京大学で日本戦後文学の講座。

一九九五（平成七）年　五十四歳

二月、「迷路――夢見られた夢のミクロコスモス（1）」（「星雲」第二十八号）。五月、「逆謗の救い」（石川淳『普賢・佳人』講談社文芸文庫、解説）

一九九六（平成八）年　五十五歳

二月、「埴谷雄高著作解説」（齋藤愼爾編『埴谷雄高・吉本隆明の世界』朝日出版社刊）。三月、「ふたつの青春――淪陥区・北京の鬱屈と飛翔（一）（中薗英助）」（「日本文學誌要」）、「「燕京文学」と「中国文学」」（「法政大学文学部紀要」）。七月、「ふたつの青春――淪陥区・北京の鬱屈と飛翔（二）（竹内好）」（「日本文學誌要」）

一九九七（平成九）年　五十六歳

三月、埴谷雄高追悼「二つのリュックサック――敗戦後の廃墟の中から五〇年を経て」（「週刊読書人」）。四月、「ステッキと紙袋」（「群像」（追悼・埴谷雄高））。「海の孤児――夢見られた夢のミクロコスモス（2）」（「星雲」第二十九号）

一九九八（平成一〇）年　五十七歳

二月、「対談・埴谷雄高を索めて（秋山駿）」、「小説の封印――『死霊』の〈未完〉に関する覚書」（「星雲」第三十号（埴谷雄高追悼特集号））。三月、『北京の光芒・中薗英助の世界』をオリジン出版センターより刊行。四月、「ある「聖者」の志　富士正晴の韜晦について」（「季刊文科」）。八月、「回帰と超出――中薗英助『北京の貝殻』の時間意識」（「記録者」第2次・第5号）

一九九九（平成一一）年　五十八歳

三月、「夢と虚無の彼方と現実世界――ドストエフスキィの『作家の日記』の多様性（一）」、七月に「同（二）」（「日本文學誌要」）。一〇月、「現実透視力とヴィジョンの究極――ドストエフスキィ『論文・記録』の世界（一）」（「星雲」第三十一号）、〇一年五月の「星雲」第三十二号に「同（二）」。

二〇〇〇（平成一二）年　五十九歳

二月、『西行桜外伝――夢見られた夢のミクロコスモス』を深夜叢書社より刊行。四月、再度文学部長に一年間就任。

二〇〇一（平成一三）年　六十歳

五月、「星雲」三十二号（小田切秀雄追悼特集号）。同誌に、「鼎談・小田切秀雄を偲んで（永野隆史、小笠原賢二、立石伯）」。この号で「星雲」休刊、最後の同人は小笠原賢二、立石伯、永野隆史。八月からロシアほか外国旅行。一〇月、「終わりなき青春」（囲む会編『小田切秀雄研究』菁柿堂刊）。一〇月～一二月、「新・西欧見聞抄」（「週刊読書人」）

二〇〇二（平成一四）年　六十一歳

四月、法政大学常務理事に就任、〇八年三月まで六年間。〇七年一〇月から二ヶ月間、平林千牧総長病気入院により、総長代行を務める。六月、「中薗英助追悼論文――森羅万象を視た深い眼差し」（「新潮」）。一一月、「中薗英助の作品と歴史意識――『艶隠者――小説石川丈山』から」（「國文學」）。一二月、「精神の闘いのあり方について――中薗英助の文学と死」（「現代文藝研究」創刊号）

二〇〇四（平成一六）年　六十三歳

二月、『極限の夢に憑かれたものの究極――ドストエフ

スキイと埴谷雄高の夢と小説について』を深夜叢書社より刊行。

二〇〇五（平成一六）年　六十四歳

三月、「埴谷雄高とドストエフスキィの「悪夢」」（「現代文藝研究」第二号）。一〇月、「論争について」（囲む会編『小田切秀雄の文学論争』菁柿堂刊）。一二月、「新しい方法の構築のために」（『国際日本学の構築に向けて』法政大学国際日本学研究叢書）

二〇〇六（平成一七）年　六十五歳

一一月、「変貌の美学と可能性」（石川淳『焼跡のイエス・善財』講談社文芸文庫、解説）

二〇〇七（平成一八）年　六十六歳

一〇月、「藤沢周平「たそがれ清兵衛」・小島信夫「小銃」」（「國文學」。「埴谷雄高論・二十一世紀に生きる『死霊』」（「神奈川近代文学館年報（〇七年度）」）

二〇〇八（平成一九）年　六十七歳

九月、「石川淳・躍動する「風狂」のアラベスク――石川淳における青春と老年のかたち」（尾形明子・長谷川啓編『老いの愉楽――老人文学の魅力』東京堂出版刊）

二〇〇九（平成二一）年　六十八歳

三月、『日本文学特講2』（昭和六二年のものと別）を法政大学通信教育部より刊行。一一月、『ドストエフスキィの〈世界意識〉――その文学・人間・思想・社会観の小宇宙』を深夜叢書社から刊行。

二〇一二（平成二四）年　七十一歳

三月、法政大学文学部日本文学科教授定年退職、名誉教授に。大学教員、ゼミ卒業生達から個別に退職祝いの会。同月、『玉かづら』限定三〇〇部、響文社より刊行。「文学の力について――文学は何をなし得るか」（「日本文學誌要」八五号（特集・立石伯））。四月、「精神のエネルギーの永遠性について」（石川淳『鷹』（新装版）講談社文芸文庫、解説）。一〇月、「実感にもとづく想像力の射程」（梶木剛『文学的思念の光彩』深夜叢書社、解説）。十二月末、ウィーンフィルのニューイヤーコンサートを聴くためウィーンに。

二〇一三（平成二五）年　七十二歳

四月、「総合的認識の展開者――正岡子規論を中心とした梶木剛の精神的足跡」（「短歌研究」）。一二月、「夷齋俳諧骨法――歩く一夜芙蓉の花に白みけり（「佳人」）」（「アナホリッシュ國文學」）

二〇一五（平成二七）年　七十四歳

四月、「『死靈』生成と無限大の自由へ――埴谷雄高における「自己と宇宙」のヴィジョンの始原と究極」（「星雲」第三十三号（終刊号））。九月、個人雑誌「星雲」第2次創刊号発刊、同誌に「古里を求めて」プロローグ、第一章、第二章および随感録その一「「テロリズム」について」、その二「戦後文学者の卓抜な予見性」。

二〇一六（平成二八）年　七十五歳

三月、「古里を求めて」第二章・続、第三章および随感録その三「九月の《変革なき変革》」（「星雲」第2次Ⅱ号）。同月、「杉本圭三郎、笠原淳両先達を偲んで」（「日本文學誌要」）。一〇月、「古里を求めて」第四章、エピローグおよび随感録その四「子供の貧困、虐待、陵辱、死――現代的不安と危機について（1）」（「星雲」第2次Ⅲ号）

二〇一七（平成二九）年　七十六歳

一〇月、『『死靈』の生成と変容――埴谷雄高のヴィジョンと無限の自由』、『随感録――現実の感受法と熟視のために』を深夜叢書社より同時に刊行。

二〇一八（平成三〇）年　七十七歳

三月、「《しご》をするということ――益田勝実さんの想い出」（「日本文學誌要」）。一一月、「時代と世紀の制約を超える志――高橋和巳の『日本の悪霊』とドストエフスキイの『悪霊』を起点に」（太田代志朗・田中寛・鈴木比佐雄編『高橋和巳の文学と思想――その〈志〉と〈憂愁〉の彼方に』コールサック社刊）

二〇二〇（令和二）年　七十九歳

一月、『古里を求めて』を深夜叢書社より刊行。随感録その六「二十一世紀の人類と新しいウイルスについて――目にみえないものからの問いかけのなかで」脱稿

二〇二一（令和三）年　八十歳

六月、随感録その六「正統と異端――溶解し瓦解する世界のなかで」、その七「新型コロナウイルスと現代病について――目に見えないものからの問いかけのなかで」、その八「新型コロナウイルス狂騒と終末の予兆――日本の右翼政権の迷走と悪逆非道な施政について」（「星雲」第2次Ⅳ号・終刊号）

二〇二二（令和四）年　八十一歳

七月、「星雲」特別号A刊行（随感録その九「今次の戦争とボタン戦争についての雑感――ロシアのウクライナ侵略戦争と新たな戦争の形について」）。「生の根源としての《憤怒》と破滅について」（『高橋和巳・高橋たか子電子全集9（高橋和巳　小説5『日本の悪霊』ほか）』小学館）

二〇二三年（令和五）年　八十二歳

六月、「星雲」特別号B刊行（「こころの底に響く音――『古里を求めて』の周辺にひろがる光と影（1）」、随感録その十「戦争論についての諸考察――今次の戦争とボタン戦争についての雑感（続）」）

（立石伯氏作成の年譜をもとにして、本誌編集部で一部加筆・改稿をおこなった）